留学生と日本人学生の日記交換活動における学び
―ボランティア日本語教室での実践を通じて―

松村一徳

Abstract

Through the Volunteer Japanese Class, “Diary Exchange Project” was carried out between the international students and Japanese students within Hiroshima University. Written notes were exchanged for five rounds based on the students own opinions on the certain social issues. The Japanese students who participated in this project were two first-grade students majoring in Japanese Language Education.

On the Japanese students’ side, opinions such as, “it was fun being able to actually exchange opinions on things that are difficult to obtain from the normal Japanese life”, “it is really interesting (being able to broaden my own values)”, “if there is next time, I would like participate again”, were given. However, voices such as “social issues are difficult (to understand)” were also reported.

On the other side, the graduate school student participant from China stated, “it’s good to know the “real” Japanese’s opinions and the language they use”, “I was able to confirm the images I had about Japanese people before coming to Japan”.

This project suggests that have had brought positive influences on both the Japanese and international students.

1. はじめに

本稿は、執筆者本人が広島大学構内で開いているボランティア日本語教室における実践の一部を報告するものである。

本稿の執筆者は、毎週日曜日の 13 時から 15 時半まで、広島大学構内にてボランティアの日本語クラスを開いている。2012 年 4 月からクラスを開始し、2013 年 7 月現在、一年以上が経過した。参加者の多くは広島大学の留学生（大学院留学生、大学留学生、研究生）であり、時折少数だが東広島市に住む留学生ではない外国人が参加することもある。

授業に際しては、自作の教材を使い続けている。新聞記事（社説やコラムなど）、漫画、短編小説、なぞなぞ、歌などを使い、素材の選定にあたっては、「リアルでフレッシュな日本語と日本」に触れることができるものを選んできた。

クラスはグループレッスンが主であるが、「一対一で話がしたい」という学生もいるため、グループレッスンと一対一（one by one class）を併用することもあった。

授業内容、教材の作成、運営の仕方などは現在でも絶えず試行錯誤を繰り返している。

2. 「交換日記プロジェクト」の試み

本稿執筆者が実施しているボランティア日本語クラスにおいて、教師が一方的に授業を行うクラスではなく、留学生が日本人ともっと関わりを持つことができる手法はないだろうか、また、外国人と日本人が関わり合えるクラスはできないだろうか、と考えた。広島

大学にいる留学生の多くは、もっと日本人との関わりを持ちたいと考えているものの、そのような機会を十分に生かしきれていないと感じたためである。また、日本人にとっても、外国人との交流は非常に刺激になると考えた。しかし、ボランティア日本語クラスにいる日本人は授業者（本稿執筆者）一人であり、日曜日ということもあって他の日本人協力者を毎回探して連れてくることは難しい状況であった。

そこで、日本人と外国人が毎回直接会わなくとも関わり合いを持つことが可能になる手法として、「交換日記プロジェクト」と称した授業の進め方を実施することにした。このプロジェクトは、以下のような進め方をとった。

・留学生は、授業者が用意した社会的な出来事を扱った教材（新聞記事、ニュースなど）を読み、自身の考えを文章にまとめる。
・留学生が書いた文章を日本人が読み、返事・コメントを書く。
・留学生は日本人の返事・コメントを読み、さらに返事を書く。

「交換日記」とは称するものの、ただ日常的な出来事を綴る一般的な日記では、留学生・日本人双方の満足は得られないと考え、社会的な出来事をトピックとし、それに対する意見を交換するやり方で進めることとした。

また、本プロジェクトには日本人の協力が必須であるが、日本語教育を専攻とする学部生に協力を依頼することとした。その理由は、まず日本語教育を専攻する学生は国際的な交流に関心を持つ学生が多いことが予想され、協力が得やすいと考えたことである。また、国際的な交流に関心がある学生であれば、プロジェクト中も継続的に、かつ楽しんで関わることができると考えた。そして、学部生ということで年齢・感覚ともに留学生と近く、本稿執筆者（授業者）よりも対等の立場で留学生と意見交換ができ、かつより自然でリアルな日本人の考えを表現することが可能であると考えた。

授業者が学生と交換日記や意見交換を行っても、そこには意図せずとも教師と学生という立場の違いが介入し、対等な立場で交流することが難しくなる。また、日本語クラスの授業者は外国人が理解できるように自身の日本語を多少なりともコントロールしており、自然な日本語を使っているとは言えない場合もある。そして、授業者はどうしても「指導」という視点から留学生の文章を見てしまうこともあり、それは純粋な意見の交流とは言い難い。

以上の理由から、日本語教育を専攻とする学部生に協力を依頼することとした。

3. 「交換日記プロジェクト」に関連した先行研究

上述のような留学生と日本人との間で日記や意見、文章を交換する実践は日本語教育、

留学生教育、異文化間教育において多くなされている。

得丸（1998）は、留学生と日本人学生間の作文交換活動において、留学生の中に日本及び日本人への理解や自己への気付きが促され、加えて日本語力の向上にも良い影響があると述べている。このような活動は、「異文化教育と日本語教育の二つの面で効果を上げ得ることが示されたと言えよう」（得丸：1998, p177）
と述べられているように、留学生にとっては単なる日本語の学習に留まらない効果が期待できる。

園田他（2006）では、三つの留学生と日本人学生の交流の実践について述べられている。日記や文章の交換はないものの、話し合いをしたり意見を述べたりする交流活動を通し、留学生の日本語学習のみならず、日本人学生にとっても自己や日本、日本語への気付きが促され、意識が変容したり、異文化間コミュニケーションスキルの獲得につながったりするなど良い影響があったとしている。

その他にも留学生と日本人との交流は様々な形で行われているが、このような交流は、得丸（1998）や梶原（2003）では構成的グループエンカウンターというカウンセリング心理学の面から、参加者に自己開示、受容、自己への気づき、他者への気づきが促されるという心理面へのポジティブな有効性があると指摘している。また、園田他（2006）や奥村（2005）は、内省、メタ認知、自己モニタリング能力といった学習上非常に重要な能力の活性化にも有効であると指摘している。

本稿で取り上げている「交換日記プロジェクト」においても、先行研究で指摘されているような心理面へのポジティブな影響、学習上の能力の活性化といった有効性が、留学生と日本人学生双方に期待できると考えられる。

4. 「交換日記プロジェクト」の実際

「交換日記」は、2013 年 6 月 16 日（日）から 2013 年 7 月 19 日（金）まで実施された。本稿執筆者は毎週日曜日にボランティア日本語クラスを行っているため、まず毎週日曜日に、留学生にあるトピックについて意見・考えを書いてもらい、それに日本人学生がコメントを書くという手順で行った。全部で 5 つのトピックについて意見交換が行われた。

プロジェクトに参加した外国人日本語学習者は全部で 5 名だったが、本稿は留学生を対象にしているため、留学生ではない 1 名は、本稿から除外することとした。したがって、留学生の参加者は全 4 名であり、中国人 1 名、ニュージーランド人 1 名、韓国人 2 名であった。

また、協力を依頼した日本人学生は 2 名だった。2 名とも、日本語教育を専攻とする学部生 1 年生であった。

日本人学生は、留学生が書いた物すべてに対し、コメントを書くことを要求された。し

たがって、最大で4枚に対してコメントを書くこととなった。

留学生は、日本人学生のコメントに対し、返事を書くことも要求された。しかし、日本人学生はコメント記入の負担が大きくなりすぎることを考慮し、留学生の返事に対して再度返事を書くことは要求されなかった。

なお、留学生の意見の記入や日本人学生のコメント書きに際しては、お互いの名前や性別、所属、学年などは個人情報保護の点と、安心して書きたいことを書ける環境をつくるため、公表しないこととした。

以下に本プロジェクトの手順を図示する。

6月16日（日）

留学生はトピック1について考えを書く。

（トピック1：「あなたが考える日本の良さはどんな点ですか」）

6月17日（月）～6月21日（金）

日本人学生はトピック1の留学生の考えについてコメント、意見、質問、感想などを記入する。

（金曜日に本稿執筆者が回収）

6月23日（日）

① 留学生は日本人学生のトピック1に関するコメントを読み、返事を書く。

② 留学生はトピック2について考えを書く。

（トピック2：「スマートフォンの良い点と悪い点は何だと考えますか」）

6月24日（月）～6月28日（金）

① 日本人学生はトピック1の留学生の返事を読む。

② 日本人学生はトピック2の留学生の意見についてコメントを書く。

（金曜日に本稿執筆者が回収）

6月30日（日）

① 留学生は日本人学生のトピック2に関するコメントを読み、返事を書く。

② 留学生はトピック3について考えを書く。

（トピック3：「あなたが国民栄誉賞をあげたいのはどんな人ですか」）

7月1日（月）～7月5日（金）

① 日本人学生はトピック2の留学生の返事を読む。

② 日本人学生はトピック3の留学生の意見についてコメントを書く。

（金曜日に本稿執筆者が回収）

7月7日（日）

① 留学生は日本人学生のトピック3に関するコメントを読み、返事を書く。

② 留学生はトピック 4 について考えを書く。

（トピック 4 :「①国連の委員会における日本人大使の『シャラップ』という発言について、どのように感じますか」「②国連の委員会における『日本の司法制度は中世のようだ』という日本に対する批判は、妥当だと思いますか」）

7 月 8 日（月）～7 月 12 日（金）

① 日本人学生はトピック 3 の留学生の返事を読む。

② 日本人学生はトピック 4 の留学生の意見についてコメントを書く。

（金曜日に本稿執筆者が回収）

7 月 14 日（日）

① 留学生は日本人学生のトピック 4 に関するコメントを読み、返事を書く。

② 留学生はトピック 5 について考えを書く。

（トピック 5 :「スノーデン容疑者の機密情報告発事件について、どのように考えますか」）

7 月 15 日（月）～7 月 19 日（金）

① 日本人学生はトピック 4 の留学生の返事を読む。

② 日本人学生はトピック 5 の留学生の意見についてコメントを書く。

（金曜日に本稿執筆者が回収）

5. 参加者へのインタビュー調査

本プロジェクトによって留学生と日本人学生は何を学んだのか、またどのような影響があったのかというプロジェクトの成果を検討するため、参加者へのインタビュー調査を行った。インタビュー対象者は、日本人学生 2 名と、中国人の大学院留学生 1 名とした。留学生の参加者 4 名のうち、この中国人大学院留学生はプロジェクトに毎回参加したため、成果を検討するのに適当と考えた。

また、日本人にもインタビューを実施することとした。その理由は、上述の先行研究の通り、日本人学生にも心理的への影響、学習上重要な能力の促進といった有効性が期待されたためである。特に今回の参加者の日本人学生 2 名は学部 1 年生であり、これから多くの学習と経験を積んで成長していく時期であることから、本プロジェクトの成果がより顕著に表れるのではないか、と考えた。

インタビューは 7 月 15 日（月）から 7 月 19 日（金）の間に行われた。留学生・日本人学生ともに次週から期末試験が多く行われるため、参加者の負担を考慮してこの期間に行うこととした。この期間はまだトピック 5 に対する日本人のコメント書きが完了していない期間であった。したがって、インタビューはトピック 4 までの成果について行われることになった。

インタビューに協力した日本人学生Aは7月16日（火）の14:30から10分18秒間、日本人学生Bは7月16日(火)の16:20から17分16秒間、中国人留学生Cは7月17日(水)の12:00から35分46秒間、いずれも食堂で行われた。

インタビュー内容は、本プロジェクトに参加した理由や印象、勉強になったこと、困難に感じたこと、プロジェクトの改善点のほか、連絡事項や学生生活、将来のことについて、などであった。

インタビューは対象者の了解を得てICレコーダーにて録音し、文字起こしした。文字起こしに際しては、頷き、相槌、笑い声、雑音は省略し、会話内容が分かりやすくなるようにした。

これらのうち、留学生や日本人学生の学びが表れているもの、本プロジェクトの成果と思われるものを次に挙げる。

成果1：「交換日記プロジェクト」は有益な時間だった

日本人学生A

本稿執筆者：大変なことはなかったですか。

A：大変なこと、一番最初は人数がけっこういらっしゃったので、書くのが大変だったのと、自分より先にもう一人の人が書かれてたので、同じ意見を書いてもつまらないだろうなと思って、工夫しないといけないのがちょっと大変だったんですけど、でも本当に全然、**楽しくやらせていただきました。**

本稿執筆者：そうですか、よかったです。

日本人学生B

本稿執筆者：もうちょっと、ここをこう変えた方が良いっていうのは、ありましたか。

B：うーん、（長い沈黙）、**すごい面白かったので、私個人としては。**

留学生C

本稿執筆者：日本人から返事をもらって、嬉しかったですか。

C：はい、**もちろん、嬉しかったです。**

本プロジェクトに関して、3名とも「楽しかった」「面白かった」「嬉しかった」と語っていることから、本プロジェクトは好感を持って受け入れられたことが分かった。

次に、参加者は具体的にどのような点が良かったと感じているのかを挙げる。

成果2：刺激を得て世界が広がった

日本人学生 A

本稿執筆者：一年生なのでちょっと難しいことがいっぱいあると思ったんですけど、留学生が書いていたことを読んでみて、勉強になったことはありましたか。

A：本当に、何か、中国とかの人が日本人をどう見ているのかとか、どういうところをすごいと思っているかとか、見方とか、**自分自身そんなに深く考えることがなかったので、それを読んで、自分が考えさせられたという感じで、自分が勉強になりました。**

日本人学生 A

本稿執筆者：留学生の返事は、ご覧になりましたか。

A：はい、見ました。

本稿執筆者：どうでしたか。長かったと思いますが。

A：本当に、**いっぱいいろいろ考えてるんだなって思って、すごく勉強になったし、**はい、何か、感動しました。自分も最初あんまり、中国の人とか、ニュースを見て良い印象を持ってなくて、それで、中国は今人間で言ったら 30 歳くらいのまだまだ未熟者なんですっていうのを見て、中国の人はそう考えてるんだなって、**初めて知りました。納得しました。**

日本人学生 A

本稿執筆者：印象に残っている意見っていうのはありましたか。ああ、外国人ってこんなこと考えてるんだ、とか、今までに考えたことがなかったこととか。

A：何か、日本では、物が無くなったことがないとか、花を植えてるってやつとか、返事にあった、これから中国は変わっていくと思いますとか、そういうのに、**そんな風に見てくれてるんだ、とか、そういう風に考えてるんだ、**とか、はい、感動しました。

日本人学生 B

本稿執筆者：特に勉強になったことってありましたか。

B：外国の方から見て、**日本がどう見られてるのか**っていうのが、とか、一番よく表れてたのが、日本人の良さとか、というところで、**ああそんな風に思ってもらえてたんだなってところは、一番の発見でした。**

日本人学生 B

本稿執筆者：今回、外国人の考えとか知ることができて、何か役に立ちましたか。

B：そうですね、自分はまだボランティアに入っている訳ではないので、すぐ授業に使え

るとかは無いと思うんですけど、**これからいろんな、外国の方と、直接、考えを話せることはなかなか無いと思うんで、良い経験ができたな、と。**

日本人学生 A と B ともに、新しい発見があったと語っている。日本にいるだけでは知ることができない、リアルな外国の情報を直接外国人から得ることで、新しい世界を知ることができたと感じていることがうかがえる。

成果 3：自身の予想を確かめることができた

留学生 C

本稿執筆者：日本人に色々、意見とか返事とかもらいましたけど、どうでしたか。役に立ちましたか。

C：はい、役に立ちました。例えば、**私の考えが証明されたんです。**

本稿執筆者：そうですか。それって、どういうことですか。

C：来日前、日本のイメージ、持ってます。いろいろ予想しました。でも分からない。今回、日本人に質問して、**私の予想、90 パーセントぐらい、予想と同じでした。**

留学生 C は来日前から日本語や日本について様々な勉強をしていたようである。日本人や日本に関するイメージを、来日前から持っていたが、それが大よそ正しかったことが分かったと語っている。生の日本人と交流できたことによる成果だと言えるであろう。

成果 4：返事をもらうことにより、コミュニケーションへの意欲が湧く

日本人学生 A

本稿執筆者：日本人と話をしたいけど、なかなか日本人と接点がないから、こうやって若い日本人の意見が聞けるっていうのは、良かったと言ってまして、僕のような教師じゃなくて、年齢も近いから、本当に留学生の人も喜んでました。お二人の書いてくれてたのを読んで、本当、嬉しそうでした。

A：私も、返事を書いてくれてたのを見て、すごく長文で、書くの大変だろうなと思うぐらい、丁寧に書いてくださってて、**自分も嬉しかったです。**

日本人学生 A

本稿執筆者：また来学期、どこかで僕がまたやると思うんですけど、やってみて、変えた方がいいところとかもしあったら。

A：せっかく返事をいただいたから、もしよかったら、**自分も返事を書きたい、返事に返事を書きたい思った**のと、それと、日本についてっていうのを書いてらっしゃるので、自分も勉強になるんですけど、国についてっていうのも書いてくだされば、**自分も相手の国についてとか、考え方とか、勉強になると思いました。**

日本人学生B

本稿執筆者：返事はご覧になりましたか。
B：はい。
本稿執筆者：どうでしたか。こういう人たちのこういう返事を見て。
B：**返事に返事を返そうか、迷ったぐらい、嬉しかったです。**

本プロジェクトでは､留学生は日本人のコメントに対して返事を書くことを課されたが、日本人学生は返事に返事をすることは要求されなかった。それは日本人学生の負担が大きくなりすぎることを懸念したためだったが、日本人学生 A と B は、留学生からの返事を非常に好意的に受け止め、自分も返事に返事を返したいというコミュニケーションへの新たな意欲が湧き起こっている様子がうかがえる。次回のプロジェクトへの改善点を聞き出そうとしたものだったが、自分が書いたものに対して反応があると、さらにコミュニケーションへの意欲が強まることが示唆され、予想外の結果であった。

成果 5：分かっていないことに気づく

日本人学生B

本稿執筆者：大変なことはなかったですか。
B：何か、**けっこう日本人として難しい話題が多かった**ので、
（中略）
本稿執筆者：一年生なので大変なことが多かったと思いましたが、難しかったことは。
B：**時事問題はけっこう難しいなと。**

日本人学生 B は、トピックとして扱った社会的な出来事が、難しかったと語っている。本プロジェクトでは、トピックを次第に難しいものへと強度を上げていった。日本人学生は一年生ということもあり、様々な社会的な出来事について、その問題の背景にある事柄や、問題の存在自体を知らないこともあり得る。留学生 C は大学院留学生であり、専門知識や予備知識に日本人学生と留学生との間で差が大きかったことが分かった。

今後、このようなプロジェクトを行う際には扱う出来事を調整する必要がある。しかしながらこのような経験は、参加者に「自分は何も分かっていなかった」ということを、実

感を持って分からせることができ、成果 1 と同じく参加者の世界を広げることにつながると考えられる。

6. まとめ

今回、「交換日記プロジェクト」という手法によって、間接的にではあるが、留学生と日本人学生が関わり合いの中で学ぶ試みを行った。留学生と日本人学生のインタビューから判断すると、書き文字を通した間接的な関わり合いであっても、両者に良い影響があったことが示唆された。例えば、外国人からの刺激を受けて新たな発見をしたり、世界が広がったりすることがうかがえた。また、自分が書いたものに対して反応をもらうことで、コミュニケーションへのより強い意欲が喚起された様子も見られた。

先行研究によれば、留学生と日本人学生の交流によって心理的なポジティブな影響や学習上重要な能力が促進されることが期待されたが、本プロジェクトにおいても両者に心理的なポジティブな影響があったことが分かった。そして、新たな発見をしたり、分かっていないということに気づいたり、予想していたことが正しいと確かめることができたりするのは、内省、メタ認知、自己モニタリングといった学習上の能力につながっていくものであると考えられる。先行研究で指摘されていたことが、本プロジェクトを通じても表れていたと言えよう。

しかし、本プロジェクトで示唆された留学生・日本人学生の学びが明らかなものであるのかは、今回の結果だけでは判断できない。本プロジェクトで体験したこと、感じたこと、学んだことが留学生・日本人学生たちの実際の行動にどのように影響するのか、それをもって判断するべきであると考えるからである。したがって今回のプロジェクトで終了とするのではなく、継続して観察していく必要がある。

参考文献

奥村 圭子(2005)「異文化間コミュニケーション教育における内省の活性化」『言葉の学び、文化の交流：山梨大学留学生センター研究紀要』1 号, 山梨大学, pp.17 – 29.

梶原 綾乃（2003）「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117 号, 日本語教育学会, pp.93 – 102.

得丸 智子（1998）「留学生と日本人学生による作文交換活動 - 構成的エンカウンター・グループを応用して - 」『日本語教育』96 号, 日本語教育学会, pp.166 – 177.

園田博文・奥村圭子・内海由美子・黒沢晶子（2006）「留学生と日本人学生の交流活動実践から見えてくるもの - 『気づき』を通した異文化間コミュニケーション能力の養成に向けて - 」『山形大学紀要（教育科学)』第 14 巻第 1 号, 山形大学, pp.11 – 33.